

2011年度 第1回公開講演会
世界で一番幸福な国 デンマーク
—その教育の秘密—

講師 難波克彰 (東海大学教授)

今日は「世界一幸せな国」に選ばれたデンマーク、その教育についてお話をさせていただきます。

デンマークはドイツ、スウェーデン、ノルウェーといった大きな国に隣接した小さな国です。面積は九州ほどで、人口は550万人の小国です。

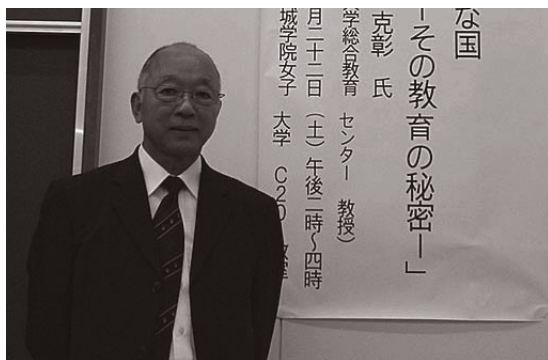
東海大学は創立者が内村鑑三の「デンマルク国の話」で、戦争によらない国づくりの歴史に興味を持ちデンマークを研究するようになりました。その国づくりに大きな役割を果たしたのがフォルケホイスコーレという青年教育機関で、その教育思想が我々の大学の教育の理念につながりました。

そのデンマークが、2006年にイギリスのレスター大学のホワイト教授の調査で世界幸福度1位になりました。デンマークは高税で有名ですが、99年の朝日新聞の記事で、「税金は高いが、国民の満足度は高い」と紹介されました。現在、OECD加盟国の中でも国民の税金負担率は一番高く71.7%です。我が国は39.5%ですから、いかに高税の国であるかが分かります。さらに消費税をみてもデンマークは25%です。スウェーデン、ノルウェーも25%です。アイスランドは25.5%ですが、これは金融危機問題を抱えて一気に消費税が上がりました。

こんな高い税金を払っていてもどうして幸せなのかと思われませんが、その理由は、教育、医療、介護が無料で、年金制度がしっかりしており、老後の不安がなく、安心して生きていけるということが幸せ感や人生に不安を感じないからだと思います。

歴史的背景とグルントヴィ

デンマークは、かつては大国でした。ノルウェーからスウェーデンの沿岸地帯はデンマーク国王が治めていました。北欧の肥沃な所は全部デンマーク領でした。ドイツとの国境、乳牛の産地ホル



スタイン州もデンマークの王様が治めていました。しかしヴァイキング時代以降、度々、戦争をし、その多くに敗戦しました。19世紀になるとイギリスがコペンハーゲンを砲撃し街は壊滅しました。またホルシュタイン州もドイツと戦い敗れて失ってしまいます。1813年には国の銀行が倒産しました。

このように国家が退廃すると、社会は乱れ、若者たちは意欲失ってしまいます。当時の新聞には浮浪者の若者があふれている挿絵が載っています。社会が活力をもたないと若い人たちが社会の中で何をしたらいいか目標を持たないということです。この社会的状況の中でニコライ・フレデリック・セベリン・グルントヴィ (Grundtvig, N.F.S. 1783-1872) という人物が立ち上がります。

彼はコペンハーゲンの南のウドヴィ村の貧しい牧師の子として生まれました。母親は首都コペンハーゲンを造ったアブサロン (Absalon 1128頃) という司教の家系の出身で、とても教育熱心でした。彼がわずか7歳の時に手元から放し、ユラン半島の方まで、ラテン語の勉強をさせるために行かせます。少年はエリートコースを歩んで、コペンハーゲン大学の神学部を卒業します。もちろん国教会の牧師の資格をとります。

しかし牧師となったグルントヴィは、形骸化

していた国教会を批判したため、宗教的な活動の制約だけでなく、集会や出版の自由を奪われます。しかし詩人として、また歴史家として大きな業績をあげます。国教会とは対立したグルントヴィですが、彼の詩にメロディがつけられた聖歌が、今でも一番多く歌われています。童話作家、アンデルセンもグルントヴィと同じ時代を生きました。アンデルセンも詩を書きましたが、数倍、グルントヴィの詩が歌われています。これは彼の思想や人柄が、民衆に受け入れられていた証でもあります。

そのグルントヴィが、青年たちが生きる意欲を持っていないのは教育が原因だと批判をしました。

彼は、「人間がこういう人工的な卒中を通り抜けることはまれで完全に回復することは決してないだろう」と断言していますが、当時の学校は暗記中心の詰め込み教育をしていました。デンマークは1814年に庶民学校令が制定され村落学校が開校しますが、そこで行われていたのは暗記と試験と強制的に学ばせる教育でした。グルントヴィは、そうした学校を「暗黒の学校」あるいは「死の学校」と呼びました。彼は、「学校はパンの代わりに石を子どもたちに与えている」と言っています。パンを食べれば栄養になるが石を食べれば身体を壊します。さらに強制的に学ばせるということで心がだめになってしまうという指摘でした。

このような競い合いの教育が、自分さえよければよい人間を生み出している。結局は心が育っていない身勝手な人間ばかりになってしまっ、自分たちの社会が困窮している時にも、立ち上がることができないのだと指摘しました。

そこでグルントヴィは、このような社会を改善していくためには「生のための学校」、「フォルケホイスコーレ(folkehøjskole)」という新しい青年教育機関を作り、そこで青年たちを学ばせることを提言しました。

(注)ホルケホイスコーレは「国民高等学校」、「民衆大学」など色々な訳語が使われるようになり、社会教育学会では現地語の「フォルケホイスコーレ」、あるいは略して「ホイスコーレ」と呼ぶことになりました。ただ、古い文献は国民高等学校などと表記してあります。

研究上の疑問と発達の問題

もともと私は、テレビの視聴効果と社会的責任が研究のメインテーマでした。番組を見せてその効果を測定しました。例えば暴力的な番組を見せたら暴力的な行動が増えたか、あるいは減った場合はカタルシス効果があったとかで論文が書きました。単純な因果関係で説明する研究は、100積み上げたら、100の答えが出てくる。すなわち、同じものをみせてもある子どもは暴力的になる。でも、もう一方の子どもは何も変わらない。同じ子どもに別の番組を見せたらまた結果が変わるといったように結果は流動的です。こういう研究をたくさん積み上げていっても、何もわからないのではないかと悩みました。そのような時にピアジェ(Piaget, J. 1896-1980)に出会いました。彼は、当時は先進的な発達心理学者で、ダイナミックな発達理論というものを掲げたということで話題になりました。

それまで発達心理学者は子どもをどのようにしたら大人と同じレベルに到達させるか、すなわち子どもは何か間違いを犯していて、その間違いを直すことが教育の目的であり、心理学はその方法を発見するものだという考え方だった。だから子どもは大人のミニチュアで、教育はそのミニチュアを大人と同じものにすることが目的だと考えていました。

ピアジェはそうした考えを否定しました。彼は知能の発達には段階があって、その段階に固有な認識能力があり、それは大人の認識とは違っていても間違っているのではなく、発達段階に沿った正しい認識であるとししました。最初は感覚で物事を知っていく。次に具体的思考操作で行動を通して物事を認識していく、最後には形式的思考操作で、概念を自分の頭の中で組み立てて、物事を理解出来るようになるとピアジェは説明しました。この過程を脱中心化と呼びましたが、脱中心化というのは「わがままでなくなる」という意味ではなく認識が自分の感覚や行動から離れて、概念や抽象的なもので客観的に物事を理解出来るようになるということです。

最近の若い人たちは本を読むことがとても苦手です、これは具体的思考操作の段階に強く依存しているからです。何か具体的なものによりかからないと物事が認識できない。大学の講義でも抽象的な概念的なことを話すと、「今日は何もわかりませんでした」「難しかったです」と言われる。必ず具体例を挙げないと理解が出来ないというのは若い人たちがメディアを通して仮想な世界の中で行動したり、感覚的に受け止めたもので物事を考えているということが影響していると思います。若い方は抽象的な概念で物事の答えを出すという訓練は大事なことだというのは否めない事実だと思います。

そうした立場で、映像認知の発達研究をしていたところ、新たな現象に気づきました。テレビの画面上で光点を動かして、その運動速度とか空間がどんなふうに捉えられているか研究してみました。ところが、画面上に体験した空間と実際の空間との間にどうもズレがあるということに気づきました。

また、社会性の欠如の問題です。テレビばかり見たり、テレビゲームばかりやっている子どもや青年に、人とコミュニケーションが取れない人が増えたということです。知的な操作は出来るのに対人関係がうまくできない、さらには精神的にとっても不安定で心に問題を抱えるというのも若者の間に増えている。

そのような時に、K大学の先生が「キャッチボールをさせたら顔でボールを受ける」と話されました。受験勉強一辺倒だった青年が、体育の授業でボールひとつ受けることができない。実際に飛んでくるものの速度や距離、位置が認識できなく、顔に当たるのを回避するということが出来ない。さらに、その先生はコミュニケーションもうまくとれなく「隣の人とメールで話している」と話されました。

どうも形式的思考操作が出来ようになったからといって人間の発達はそのことで完了したわけではなさそうだ。人間には知的なものとは別のもっと重要な要素がありそうだ、そこをきちんと発達心

理学や教育の場でやっていかなければ問題はさらに深刻になるのではないかと考えていました。

コルの教育観

そうした私自身の疑問や問題に光を与えてくれたのがデンマークのクリステン・コル(Christen Kold 1816-1870)でした。

コルは「まだ成熟に至っていない知性の発達ばかりを意図して、子どものファンタジーの能力をまったくといっていいほど顧慮しなかったのである。この無理解な方法は、子どもは動物であり、しつけや指導で人間になるべきであるという考えを、意識的であれ、無意識的であれ人が信じ込んでいることである。」と言っています。ピアジェが指摘した高いレベルの認識を強制していないか、そのことで子どもたちの中にある好奇心や興味を無視してはいないか。我々が教育といってやっていることとは何かといった時、自分たちに都合がよいように犬を訓練するのと同じような感覚で、子育てをしたり教育をしたりしているのではないか、というコルの指摘に私は共感しました。

コルはこうも言っています。「学校では子どもたちは、自分たちが自然に振る舞うことを許されていない。そのために、彼らは奴隷根性をもつようになる。それを如実に表すものが彼らのずるがしこさ、悪知恵であり、子どもたちは小さなイタズラをするときに教師の注意をうまく避けることで身につけたのである。教師は、概して刑務所の刑事官と見なされ、彼らからうまく逃げ出せたとき、馬鹿にしてもいいとされるような人物なのである。」

19世紀の指摘ですが、実に今の日本の教育の現状を表していると思います。先生の前で要領良く立ち振る舞う子が良いと子といわれ、むしろ学校集団の中では評価される。しかし、内心は先生や親が喜んでくれる、良い子と評価してくれるからそのように振る舞っているとしたら、それが人間的な成長か、あるいは人間としてそれでいいのかということです。こうしたことを我々が教育の現場でやってしまっていないか、あらためて考え

させられました。

コルはグルントヴィの教育思想を実践した人物です。グルントヴィ自身は実際に教師として活動してはいません。グルントヴィの教育を具体化したのはコルです。特に彼は後の幼児や児童教育に非常に強い影響を与えました。彼の教育の基本原則は「子どもの心を傷つけない教育」、そのために「物語による教育」という彼独自の手法を編み出しました。

世界中でベストセラーになった「ソフィーの世界」という本があります。ノルウェーの高校の先生だったゴルデル.Jが書きました。彼は一人の少女を主人公にして哲学の歴史を物語として書きました。多くの人たちが分かりやすいとか、読んでいておもしろいと評判になりました。気難しくて避けたいと思う哲学を身近なものにした、ということで話題になりましたが、その手法はコルにあったのです。

なぜ、コルがそのような手法を考えたかは彼の経験が大きいと思います。コルは、ユラン半島の北の小さな漁村で生まれます。父はアンデルセンと同じように靴の職人で、貧し中で子どもを一人前にしたいと教育を受けさせて師範学校に行かせ、先生の助手の資格をとらせませす。学校に勤めることができ、子どもたちに教えますが、ある日、正教員が助手のコルに聖書の一節を暗記させるように指示します、彼は子どもたちに覚えさせようとしますが、一人の女の子がどうしても覚えられなくて泣きだしてしまいます。その時、彼は「本当に聖書の一節を少女に暗記させることを神様は望んでおられるのか」、という疑問を持ちました。その答えはすぐにでました。コルは「泣かせるようなことを神様は強制していない」。コルは学校を辞めてしまい牧師の手伝いとしてトルコに行きます。トルコでいろいろな仕事を経験した後、木の輪車を買って自分の全財産をそれに載せて、徒歩でアルプスを越えてデンマークに帰ってきたという人物です。

帰ってみるとデンマークではグルントヴィを中

心としたフォルケホイスコレ運動が高まっていました。彼もそれに賛同し、グルントヴィに手紙を出して資金援助を求めます。それに応えてグルントヴィは寄付を集めてお金を送っています。それを資金にリスリング村に小さな学校を建てます。ところが、彼の学校の評判が高く多くの人が学びに来るようになり、数年後にはダーラムに大きな学校を造りました。そこは現在、農業大学になっています。

ここで大事なことは彼が目指した教育が高い評価を受け、デンマークのその後の教育に大きな影響を与えたということです。

真の「自由」を求めて

そのコルに影響を与えたグルントヴィの教育の根本は何かということについて紹介します。デンマーク外務省が制作したグルントヴィ紹介の16mmフィルムがあるのでその一部を紹介します。(フィルム内容)

『私だけでなく真剣に生きる人間なら、少なくともそれなしでは生きられない自由、つまり良心の自由である。私が次に大きな価値を置く市民としての自由は、商業活動の自由である。第3番目はいわゆる個人の自由と呼ばれるものである。ハーダー文部大臣はグルントヴィについて、「もし私が自由に自分の意見を表現出来るならば、私の隣人も自由に同じことができ当然である。私たちがデンマーク国で自由であるためには他国の自由をも認めなければなりません。」そしてそこで是非必要なのはグルントヴィにとっては知的・精神的自由すなわち、思想の自由・言論の自由に関して、これこそ民主主義よりはるかに価値があると言っているほど重要な問題であったということです。グルントヴィにとっては人間としてふさわしい状態を啓蒙し、理解することが民主主義と自由にとって不可欠なものであったのです。』

グルントヴィにとってのキーワードは「自由」です。

当時はデンマークも絶対王政の封建社会でしたが、フレデリック6世(Frederik VI 1808-1839)

は、市民との交流の場を設けていました。グルントヴィも1826年に謁見しています。グルントヴィは詩人、歴史家として名がありましたので、王様はグルントヴィに「今、何をしてるか」と問いかげられました。その時グルントヴィはまだ、出版と言論の自由を奪われていましたので「何もしていません」と答えところ王様がアングロサクソンの研究のためイギリスへの留学資金を出してくれました。グルントヴィは2度、イギリスに留学をしています。

イギリスに行くとはデンマークとは違って自由な空気が流れていました。多くの市民が生き生きとしていました。これを見てグルントヴィは、デンマークもそういう社会にならなければいけないと思います。しかし、デンマークの人々は酒に溺れたり、泥棒が横行したりしていました。グルントヴィは彼らを「オオカミやクマのような自由」を手にしたと言っています。しかし大事なものは「成長した人間の自由」だといいます。啓蒙思想のひろがり、「自由」が叫ばれていましたが、デンマーク市民が「自由」を理解していないことに問題を感じていました。「自由」の間違った理解は、結局、教育が原因である。「人間の自由」をしっかりと理解した市民を育てなければ民主主義社会はかえって危険だと考えていました。そこで「人間の自由」を学ぶ場として、フォルケホイスコーレという青年教育機関を作ることを提案します。

ホイスコーレは、18歳以上であれば誰でも学べます。学歴や年齢を問わない、学ぶことに差別はないということです。なぜ18歳かといいますと、生き方や人生を考えるのは18歳くらいにならないと無理だということです。

次に、試験をすればいけない。試験をすると競い合います。試験をしませんから単位や卒業資格は与えられません。自分自身のために学ぶのであり、試験や資格取得のために勉強するのではないからです。

そして全寮制で学びます。教員とその家族もホイスコーレと一緒に生活をしました。学ぶことと生活することを分離してはいけないとグルントヴィ

は言います。そして共同生活をとおして、人間みな同じという人間理解につながりました。

就学期間の基本は、当時も現在も16週ですが、これは農閑期だけ開校したためです。そしてホイスコーレは有料ですが、単位も資格も与えられない学校で、現在においても16週以上の長期コースに年間で1万人、短期コースを入れますと3万人の人たちが学び続けています。

ホイスコーレでの意識調査で一番「良かった」としてあげられたのが「自由を得られた」でした。自由な学校で学ぶことで、人々を「真の自由」の理解につなげているのだと思います。

「生のための教育」

フォルケホイスコーレは、知識を詰め込む所ではありません。「我々は何のために地球上に存在するのか」、「自分が生きている目的は何か」といった人生の本質の問題に向き合う場所です。そのために様々な勉強をします。哲学や歴史などの人文系、政治学や国際関係論などの社会科学系、そして自然科学系の勉強をします。大学での教養教育に似ていますが、人間とは、社会とは、自然とは何かを学ぶことで「生の問題」と向き合う場所だといえます。

「どう生きるべきか」、この問題に真剣に向き合うことが教育の目的であり、人間として成長していくための重要な課題であるとグルントヴィは考えていました。

宮城学院女子大学の学長が「3.11を通して、多くの学生諸君、あるいは卒業された方が死とは何か、生とは何かという問題を考えただろう。答えはないかもしれないけど、そのことを常に考えていることが我々人間にとっては大事である」というお話されたことをウェブで読みましたが、グルントヴィと同じ考えだと思います。

「どう生きたらいいか」とか、「人間はなぜ存在しているのか」という答えは、誰も与えてはくれない。それは自分で答えを出す以外はないんだとグルントヴィは言っています。「どう生きるべきか」を学校で教えてもらえる、教えられると思っ

たら大間違いなのです。また、教師はそれを教えることは出来ない。グルントヴィは、「教師は生を創造できず、若者の心の内に実在している生を目覚まし、養い、啓蒙するのみなのである」と言っています。

しかし日本の教育者には錯誤があります。“人材育成”ということばを平気で使います。人間を材料だと考えています。物として扱っていて、企業や社会に役立つようになればそれで教育は良いという考え方がどこかに存在している。こうした考え方を問いかけたのがグルントヴィであり、ホイスコーレの教育の理念であると言っても決して間違いではないと思います。

実際のホイスコーレを紹介します。(フォルケホイスコーレの紹介(ビデオ映像))

ホイスコーレではいろいろな場面で歌を歌います。感性を磨くためだけでなく、共同で何かを行うことを重要視しています。そして感性を育てるために絵や陶芸、音楽など創造的な科目があります。ゼミ形式の授業や共同生活をする中で、互いに人間を知ることが出来ると考えられています。いろいろな人とディスカッションをすることで、自分と他の人との違いを知り、自分という人間を再認識出来る場がホイスコーレです。

グルントヴィは、「自分とは何か」を知ることは、自分の価値を知ることであり、他人の価値を認めることだと考えていました。「自分が自由であるためには、他人の自由も認めなければならない」ということをホイスコーレの教育と共同生活から気づかせようとしたのです。

「ことばの相互作用」

グルントヴィはその実現のために必要なことは何かについて次のように言っています。「有益で楽しい人生を生きるかを学ぶために、大多数の人々は現実には書物など必要とせず、ただ正直な心と健全な公共感覚、かなり良い声、かなり良い舌をのみ必要とする。そうすれば十分に活気が生じ、ふさわしく啓蒙された人々と語り、自らの

注意力を目覚めさせ、彼らに生の光が当てられ、生がどんなものであるかを示すことが出来るのである。」

そして、「唇から出てきたことばは、その人の本質を表し、構成するものである。話されたことばを抜きに生活は存在し得ない。」と言っています。「生きたことば」による相互作用によって生に対する自覚が生まれると説いています。

普段、私たちは会話をとおして「あの人はどういう人」なのかを知りますが、お互いにそうした相互作用から「人間とは何か」を知ることが出来ません。そうした理解によって社会が出来上がっています。

ですからグルントヴィがいうように「生きたことば」をぶつけ合わなければそこには本当の相互作用は生まれません。日本では昔から「本音と建て前」といって本音を言わないことが美徳されることもありましたが、立身出世のために心にもないことを言う人もいます。このような「偽りの会話」で構成された社会は、「装った社会」ということになります。「生きたことば」での会話、ことばで言うとは簡単ですが、なかなか実現は難しいものですが、ホイスコーレは成績も何もない、人間関係においても利害関係がないので「生きたことば」が交わしやすいのです。

コルは、「生きたことば」でこどもの教育も行うべきだと考え、フリースコーレ(Free Skole)を作りました。強制も試験もしない自由な子どもの学校です。デンマークの公立学校でも12歳まで試験をしてはいけないという法律がありました。試験をしなくても子どもたちは学ぶことが出来るということを示したので、それが引き継がれていたのです。

フリースコーレの様子を紹介します。(ビデオ映像)

小学校1年生に当たるクラスです。蠅たたきで黒板を叩いていますが、母音の勉強をしています。先生が言った母音を子どもたちが押えますが、バラバラです。まだ十分に学習が成立していないので、子どもたちは間違ったところを指しますが、

先生も子どもたちも気にしません。無理に間違いを直そうとしません。その理由は、自分で気づいてだんだん理解が出来る、無理矢理教え込まなくても、自分で学ぶことが出来ると信じています。ですから他の子どもから1日、2日遅れも何も問題がないという考え方です。ですから、子どもたちは嫌な思いをしません、周りから批判をされない、直されることがないので、学ぶことが嫌にならないのです。無理に直されたり、叱られたりすると心が萎縮してしまいます。コルは、それを暴力だと言っています。「撲てば体を傷つけるけれど、強制して教えると心に」傷をつける、そういう教育はやってはならないと言っています。フリースコーレでは、そうした暴力がないので、楽しく学ぶことが出来ます。

上級生のクラスでも基本は教科書を使いません。先生が材料を与えたり、子どもたちから材料が出されたりしながらディスカッションで問題を解決していくという授業スタイルです。

このようなフリースコーレの教科書を使わない教育が学力に問題を起すとは単純に言えません。フリースコーレを訪問すると5、6年生の生徒(11, 12歳)が、学校案内をしてくれますが、皆、英語を話します。試験がなくてもきちんと英語が話せるようになる。私たちの試験をすることで子どもたちは怠けない、試験をしないと怠けてなにもしないという考えが大きな間違いであることも、この実情を目の当たりにすると分かるのではないかと思います。

コルの教育思想

コルが学校教育について次のように述べています。

「学校での生活は、刑務所あるいは矯正施設の生活と何ら変わらない。もし、ある人が、小さな子どもたちが不自然なまでにきまじめにおとなしく座っており、それがそうしないと嫌なことが起きるといふ恐れのためであるのを見れば奴隷根性が子どもたちを支配しているという不快な感情が生じるだろう。しかし本来は、子どもたちが教師

の周りに集まっているときというのは、もっとも喜ばしい光景でなければならない。つまり、子どもたちがほかのどの場所にいるよりも、一番幸福で自由でなければならないのである。」

そして、「子どもたちを教育する際に重要な基本原則は、書くことを学ぶ前に何か書くべき内容をもたねばならず、読むことを学ぶ前に知りたいという渴望を感じなければならない。それは、しかし、こういう本末転倒の事態が学校で生じている。『子どもにあごひげをつけて大人にしたてる』ような真似が過度に進んでいる。」

日本では、幼稚園に入る前に親は文字の読み書きを教えようとします。中には幼稚園で読み書きを教えたり英語教育をする所もある。コルは、そうした教育では子どもの心は育たないし、学習への意欲も持てなくなってしまうと警告しています。書かせるため、読ませるための訓練を学校で行うことは教育ではないと言っています。ピアジェも「子どもは大人のミニチュアではない」といいましたが、コルも同様に大人が子どもに「あごひげをつけて大人にしたてよう」としていないかと問題を投げかけたといえます。

子どもの発達にとって重要なものに「知的好奇心」とか「内発的動機付け」がいわれませんが、同じことです。たとえば幼児がなぜことばを知りたいか、話したいと思うか、そのことを無視してはいけないということです。ことばを話したいと思うからことばを身につけていく。リスリング・ホイスコーレのトーベン校長はそれを「学ぶ愛」と言いました。「子どもたちは親と愛を交換したいという願望を持ったときには、ことばを使いたいと思う。そうすれば一生懸命にことばを覚える。誰も強制しなくても覚えます。赤ちゃんがことばを獲得するのは、お母さんとことばのやりとりをすることで、自分の愛を伝え、母親の愛を感じたいと思うからことばを覚えるのです」。

先ほどのフリースコーレの子どもたちがなぜ英語を身につけたかと聞くと、「世界中のいろいろな人たちと話がしたいから」と答えます。

強制しなくても、学ぶ楽しさ、魅力を体験した人は、自ら学びます。

コルの授業論

コルは授業とは「授業は、子どもたちに対して生を明らかにする手段であり、子どもが生に光を与えて彼らの使命を果たす力を自己のうちにもつようにさせるものだが、そういうことは教師にも子どもにもなかなか思いつかない。それに、学校ではそんなことは些事と見なされている。しかし、それは生活と学校生活のなかで十分に育まれることだ。」と言っています。

日本でも以前「生きる力」を養う教育が話題になりました。それが「ゆとり教育」になり学力低下論争へとなって、いつしか聞かなくなってしまうました。

今日のように混沌とした時代、あるいは心理的問題を抱えた子どもや若者にとって教育は重要であると思います。教育者がなすべきことは何かといえば、子どもたちに知識を与えることではなく、むしろ子どもたちの生というものに光を与えるかどうかということではないかと思えます。たとえば試験をして何点を取れるような教育をするかよりはもっと大事なものを、私たちは教師としてあるいは教育に携わる者としてやらなければならないということをコルは指摘をしています。

コルによれば、「教育が真にめざすべきところは、物事を洞察する確かさ、何かを意志する生と意欲と愛、そして、それらを遂行する能力と自立性を各自の能力に応じて最高レベルで獲得することである。」と言っています。

最近、子どもに想像力がないと言われますが、想像力ではなく洞察力だと思います。物事の関係性などを洞察することがうまくできない。それは、知識はもっているけれど知識がバラバラに存在をしているためだと思います。よく、木を見て森を見ずと言います。木1本、一本はどのようなものか分かっている、森全体は見えないというのと同じことだと思います。たくさん知識を持っていても、それをつなげることができない。そうする

とそこから何かを洞察することができない。だから教育で洞察する力を養いなさいというコルの指摘は的を得ているのではないかと思います。

生と意欲と愛

さらにコルは教育の重要ポイントとして「何かを意志する生と意欲と愛」をあげています。なかでもグルントヴィがめざした共生社会の創設には「愛」は重要な意味を持っていました。「愛するとはどういうことなのか」、愛というものに対してきちんと自分の考えを持っていなければならない。その為には愛に飢えなければいけない。愛を求めなければならないということだと思います。コルは、教育の中でこうした体験をとおして気づいていく。あるいは愛を感じるによってそこから自分の深いエネルギーを生み出していくことが大事だと考えています。

この「愛」の重要性にはグルントヴィの思想が深く関わっていると思います。グルントヴィは若い時は合理主義的な考え方に強く影響されていました。大学を卒業後、エーグリッケ家に家庭教師に行ったのですが、その屋敷の婦人に彼は恋してしまいます。恋の悩みでノイローゼになってしまいますが、この体験を通して合理的に物事を考えるだけでは解決出来ないことがあることを知ります。哲学的命題として「愛」について考えたことと、自分が直面した恋愛では違っていました。合理主義から浪漫主義への転向が起きました。これをきっかけに詩人として彼は内面をことばに表すようになります。

コルも子どもにも愛を感じ、愛を理解する力があり、それを教育の場で教師が気付けるか否かを問います。コルの指導の基本に「教師が第一に精神的に目覚め、生を生きなければならない。」と言っていますが、このような教師のみが子どもの愛を感じ取れるのだと言っていると思います。グルントヴィも「生を考える教師は、生を若者たちに気付かせることはできない」、頭の中で生を考えていて立派な哲学を講じていても、その人がどう生きているかということの方が重要だとい

ます。教師が自分の生き方に自信をもって邁進している姿によって若者に生を目覚めさせることが出来ると説いています。

何度も言いますが、教師が「生を生み出せる」思ったら、それは過信だというわけです。教師はすぐ「何かをしてあげる」とか「～しなければならぬ」と言います。大人は子どもに何かしてあげられると思っっている。大人は子どもより知識や経験が豊かだから優れている、未完成な子ども、生徒や学生に教えてやる、間違いを正してやるという考えが背景にあると思います。しかし、コルやグルントヴィはそうは思っていません。

その実例を「森の幼稚園」で紹介します。(ビデオ映像)

この幼稚園では子どもたちに先生は何もしません。歩き回って子どもたちの様子を見ているだけです。指示を出したり誘導したりしません。子どもたちは森の中で、いろいろ工夫して遊びます。先生が指導して行くことと、子どもたちが考えてやることとの違いを、幼稚園の先生たちはわかっています。森の幼稚園の先生は、子どもたちの生きるための意思を呼び起こそうとしています。

子どもたちを比較できる映像があります。森の幼稚園では森のルートのポイントに集合場所が決まっています。そこまで子どもたちは自由に行動して良いことになっています。森の幼稚園の子どもたちは元気に、自由に次のポイントまで行動しています。町の幼稚園児の森での様子ですが子どもたちが手をつないで列をなして歩いています。両者を比較しても、教育の考え方ひとつで子どもたちの様子が変わることが分かっていただけるでしょう。

町の幼稚園のように管理をすると事故の心配が減ります。これは誰にとって都合がいいかという先生にとって都合が良いです。子どもたちはコルのいう「奴隷のよう」に扱われているということでしょう。森の幼稚園比較したとき「生きる力」に差を感じます。森の幼稚園がデンマークの中で大事にされている理由だと思います。

こうした森の幼稚園の考え方は、グルントヴィ

やコルだけではありません。スイスの教育者、ペスタロッチ(Pestalozzi, J.H. 1746-1827)も同じことを言っています。「汝よりむしろ自然こそが教師なのだ。鳥や虫の方がいっそう多く、しかも上手に子供を教える。すべての学習は、それに元氣と悦びとが伴わなくては少しも価値がない。子供の顔に快活と悦びとが現れている間は、子供がすべての遊戯において朗らかさと元氣と生命とをもっている間は心配ない。子供に知識を強要するな。常に見させ、かつ聞かせよ。めったに判断を要求するな。」何かが出来た、上手に出来たか、出来ないかより、子どもたちが生き生きと学んだかが大事だということです。その結果が上手か上手でなかったかは問題ではありません。下手だったらその子はもっと上手に作ろうと思えば工夫をするかもしれない。そこで評価をすると子どもの可能性が損なわれてしまう。

教師の仕事はとても怖いものです。大事なことは、子どもたちの内に「学ぶ愛」があることを我々が認めることだと思います。

学ぶ楽しさ

2000年、OECDが国際学力テストを始めました。経済発展のために加盟国が自国の学力レベルを知りたいと始められました。結果は、先進国として自負の高かったドイツやフランスが思った以上に成績が悪くて大騒ぎになりました。日本も予想より悪かったのですが、デンマークは日本よりも下にランクされました。フランスやドイツでも教育改革が行われ、日本でも「ゆとり教育」批判が集中しました。

PISAのテストでは社会が求めている学力を知識量ではなく、自分で問題を解決する力や創造性や独創性と考え、テストが作成されました。結果が一番良かったのがフィンランドでした。

そのフィンランドの教育の原点はどこにあるかということ、実はグルントヴィやコルの教育に原点があるのは間違いありません。もちろん、スウェーデンもデンマークもグルントヴィやコルの教育思想が背景にあります。北欧諸国はフィンランド

と同じ教育が行われていましたが、フィンランドが国を挙げて教育に取り組んでいたので良い結果が得られたということです。しかし、デンマークでもPISAの結果を受けて、政治家が教育改革の必要性を主張しました。試験の実施が認められるようになったり、幼稚園教育にも条件がつくようになりました。森の幼稚園も行政にプロジェクトの計画書を提出し、結果を報告しなければなりません。以前は、そうした条件がありませんでしたから森の幼稚園は自由な教育を行えたのですが、教育省から強制的に条件が付け加わるようになりました。

PISAの結果が日本より結果が良くないデンマークは参考にならないという声がありました。しばしば私たちは、実施された試験や調査の結果だけで、教育の善し悪しを論じます。しかしグルントヴィは試験について「不確かなものなので、それを点数で評価しようとは考えていない。というのは、成績は決して固定的に把握出来るものではなく、まさに未定のものだからである。」と言っています。教育は長期的にみて評価すべきと理解できます。今、受けている教育がその人の人生にとってどのような意味があるのかまで見極めなければ、善し悪しを評価することは出来ないのです。

実際に、「成人の科学的な知識」を比較した研究の結果ではデンマークは1位です。日本は先進国14カ国中12位です。何故、このようことが起こるのか、それはデンマークの人々は学ぶことに貪欲であり、学ぶことが苦痛ではなく、むしろ新しい発見につながるのだから楽しいと感じているから、学校を卒業しても学び続けています。

デンマークでは、大学に相当する高等教育を卒業する人は3割に達しません。日本のように短大を入れると半数近い方が高等教育を受けている社会にと比べると決して高学歴社会ではありません。学校を卒業すると仕事に関する以外は学ぶことが少ない日本人、何歳になってもホイスコーや図書館で学ぶデンマーク人と違いが見えてきます。この結果から学歴では社会のレベルは保たれないということです。結局は学校で、どのように学ん

だかが問題で、強制され、疲れてもういやだといった経験をさせない教育が大事だと思います。

「生きたことば」

コルは、「教える中身について、その素晴らしさと必要性に対し、生きた関心と愛が教員の個性と心情に浸透しているかどうかである。その結果、生きたことばがもつ、理解を超えた力によって、子どもたちの人格が開かれ、教師が伝えようとしている思想、感情、考え方を受け入れることが出来る。」と言っています。教師のあり方と同時に、「生きたことば」の重要性を説いています。

「ことば」を考える時。最近の日本の若い人の、なんでも「カワイイ」とか「ヤバイ」ということばが気になります。何を見ても「カワイイ」、食べ物がおいしい時も「ヤバイ」、何か悪いことをして怒られそうな時も「ヤバイ」。この一つのことばで表現出来るのはとても簡単で、しかも自分の感じていることを表せているかと思っただけかもしれませんが、本当に自分の心の中を相手に伝えることができているか疑問に思われます。個性が大事と主張しながら、言語表現は画一的です。これでは「生きたメッセージ」にはならないだろうと思います。グルントヴィは、使われることばは、その人を表していると言いました。同じ場面でも感じ方や、とらえ方の違いが判ることで、相手がどのような人物かを知ることができ、自分を知ることが出来ます。しかし、画一的な表現からは知ることが出来ません。

同じ時代の実存主義の哲学の祖といわれるキルケゴール(Søren Kierkegaard 1813-1855)は「ある人のことばが私たちにその人に愛があるということを確信させるかと思えば、別の人の反対のことばが同じように、その人のうちに愛があることを確信させるようなことさえある。かと思えば、まったく同一のことばであっても、そのことばを語る人によって、その人のうちに愛が宿っていると確信する場合もあれば、そうでない場合もある。」と言っています。キルケゴールもグルントヴィも共に「ことば」とは何かを私たちに問いかけ

ています。

コルも「教師は、自分の話すことばを意のままに扱えなければならない。話されることばこそが精神の道具であるからである。生きたことばこそペンと印刷物よりもはるかに大事で、それはコピーよりもオリジナルなものが大事であり、肖像画よりも本物の人間が重要であることと同じである。」と語っています。教師は、生きたことばを発しないと真実は伝わらないし、思いを伝えることは出来ないというのです。

森の幼稚園の先生が子どもに静かにするように注意をされた時、叱らないで「森の妖精が驚くので静かにしてください」と言いました。このことばには、相手を思いやる心もあり、相手の心を育てる思いもあると思います。こうしたことばを教師が自分のことばとして使えるか否かが問われています。「カワイイ」、「ヤバイ」ではなく、自分のことばで伝えることが出来るようになった時に、生きたことばを使っているといえるのではないかと思います。

デンマークでは先生たちの能力が高く求められています。一見すると先生たちは何もしていない、ただ傍観しているだけという印象を持たれがちですが、実は子どもたちのいろいろなことに目を配っていて、「何を目覚めさせることが出来る」のかということに注意深く見ているということです。最適なタイミングで先生がどのようなメッセージを子どもに送るかがポイントです。子どもに「何かをする」ことが教師の役割ではなく、「目覚めさせる」ことはどこにあるのかということをしっかり見極められることが教師にとって大事で、児童や幼児教育にとっても重要なポイントだと思います。

今日はグルントヴィとコルの教育思想を紹介してきました。二人に共通しているのは「自由」と「生きたことば」です。北欧の教育を原点はここにありま

最後に私が最も信頼し、尊敬するテストラップ
ホイスコーレのヤーン・カールセン校長のことば
を紹介します。

「誰もあなたの人生は歩むことは出来ない」
一人ひとりの人生は、他人が代わることが出来ない
かけがえのないものである。自分の人生もかけ
がえのないものなら、他人の人生もかけがえの
ないものである。すなわち人生とは、いや人間は等
価値であるということを彼は言っています。
大切な人生です。互いの生き方を認めあうとい
うことは、自分の自由、そして他人の自由を認め
合うことです。このことに気づかせ、自覚を持た
せることがホイスコーレ、いや教育の目的だと彼
は言います。

そして彼の「誰もあなたの人生は歩むことは
出来ない」、このことばがまさに生きたことば。こ
のことばを通じて多くの若者たちが自分の人生、
自分のあり方をふりかえることにつながってい
ます。少子化の影響で生徒が減るホイスコーレが
多い中で、彼の学校は定員を超えた希望者が集
まるのも、彼の教育が意義あるものと認められ
ているからです。

私たちもこのような「生きたことば」で語れる
人間になりたいと思います。教育者として「生
きたことば」を発していかねなければならないと、
反省を込めて最後にご紹介をさせていただきました。

(開催2011年10月22日)